



ぷらっとシネマ 黒人ユダヤ人のイスラエル「帰還」『約束の旅路』（ラデュ・ミヘイレアニュ監督）

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 萩原, 弘子 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10466/15462



黒人ユダヤ人のイスラエル「帰還」—— 『約束の旅路』 (ラデュ・ミハイレアニユ監督)

スーダンの、水も食糧もままならない難民キャンプで、周辺のアフリカ諸国から来た人々は絶望の日々をおくっている。そこへイスラエルの飛行機が飛来し、エチオピア人ユダヤ教徒（「ファラシャ」と呼ばれる人々）を「救出」という。9歳の息子の将来を案じる母親は、キリスト教徒であることを隠しとおせと彼に諭して、飛行機に乗せる。母と別れた少年は、シュロモという名のユダヤ教徒として、未知の国で新しい人生を始める。

しかし、「ユダヤ人の国」を標榜するイスラエルで、エチオピアからの黒人ユダヤ人は同じユダヤ人とは扱われない。進歩的で愛情深い養父母のもとで何不自由なく暮らすようになったシュロモも、級友やその親たちからの人種差別を経験する。養母は優しいが、それでもシュロモはアフリカの母に会いたいと思う。

生き延びるために始めた大きな嘘を抱えて、少年はユダヤ人として成長していく。ユダヤ教の成人式を行ない、イスラエル軍兵士として闘い、ポーランド系ユダヤ人の娘と結婚する。このまま彼は親しい者にも出自を偽って生きていくのか。アフリカの母に会える日は来るのか。

1982～84年、イスラエル情報機関がエチオピア系ユダヤ人をイスラエルに「帰還」させた「モーゼ作戦」の史実にもとづく物語だ。自身がエチオピアからの「帰還」者である俳優を配し、厳格なユダヤ教団、狭量なシオニストに対する批判を交えながら、ユダヤ人・ユダヤ教徒とは誰かを考えさせる（「～人」と「～教徒」という別の語をもつのは日本語特有の事情。本稿では両者を適当に使っている。もとは1語なので、厳密な使い分けはできない）。シュロモが実はユダヤ人ではないという設定は、真正のユダヤ人でないと疑われた「ファラシャ」の経験をよく伝えている。映画は、黒い肌で、割礼をしない「ファラシャ」でもユダヤ人として受け入れていこうという、シュロモの養父母の立場、つまりイスラエルの世俗的左派知識人の立場に観客が共感するようにつくられている。

血縁を越えた愛、勇気ある決断、イスラエル政府への明確な批判など、心動かされる場面は多い。まちがいに力作であり、けっこう感動させられ泣かされるが、それでもこれは手の込んだシオニズム映画と言うべきだろう。

1948年、ユダヤ人だけの国をめざすシオニズム思想から建国されたのがイスラエルだ。選別と排他を必然とするその思想に立って、世界のどこであれ、「たった一人でもユダヤ人の命のためなら全力を注ぐ」と謳いあげて決行されたのが、エチオピア系ユダヤ人救出作戦である。80年代のモーゼ作戦と91年のソロモン作戦で、2万4千人の黒人ユダヤ人がエチオピアから「救出」された。02年にも、1万8千人のエチオピア人がユダヤ人としてイスラエルに「帰還」している。イスラエルが彼らを迎え入れるのは、政治・経済的に言えば、ユダヤ人絶対多数を維持したいからであり、イスラエル経済の下層労働力をパレスチナ人から他の移民、出稼ぎ民に取り替えたいからである。また、黒いユダヤ人を受け入れれば、シオニズムは人種差別の思想だという批判をかわす効果も期待できる。エチオピア系ユダヤ人「救出」は、パレスチナ人との共存を拒否する政策の一環である。

進歩的と見えるこの映画の立場も、実はそう違わない。「ユダヤ人」の範囲を少し広げて、エチオピアのユダヤ教徒を受け入れれば、イスラエルのユダヤ中心主義は揺らぐどころか、むしろマルチエスニックな装いのもとで強化されよう。

キブツでシュロモと養父の父が語りあう場面がある。「他人の土地なら、返すべきじゃないかな」と問うシュロモに、祖父は2本の樹を指さして言う。「我々が入植する前からある樹と、入植してキブツ建設時に植えた樹が共存している。土地は分かち合うべきだ」。これを、イスラエルでの諸民族共存を希求する監督のメッセージと読む向きもあろう。しかし一人のパレスチナ人も登場しない映画で、パレスチナの、樹は残しても、人を追いだしてつくられた緑豊かなキブツから発せられる共存のメッセージは空しい。

「ファラシャ」が古代以来のユダヤ教徒である証拠はなく、彼らがいつ、なぜ、自分たちのユダヤ起源を言うようになったかは諸説あるようだ。それはともかくとして、近い歴史記憶にかぎれば、彼らはエチオピアの地で異文化・異教徒と共存してきた。それが近年になって壊れたことこそが問題だろう。まずは見て、少年の母恋物語に泣いてから、アフリカ人がアフリカで生きられなくなった背景にも思いを馳せてほしい。（2005年 フランス映画、140分）